

# 二〇二四年度 医学部医学科一般選抜試験(三日目)

## 「論文」問題用紙

### 注意事項

- 1 解答用紙に受験番号と氏名の記入を忘れないこと。
- 2 問題用紙、下書用紙は解答用紙とともに机上において退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

広辞苑で「医」という語の意味を見ると、「①病をなおすこと、また、その術、②病をなおす人、医者」と書かれています。すなわち、病を治すことや、それを行う人を指す言葉とされています。病というのは、病氣のことです。すなわち、病氣を治すことや、それを行う人を指して「医」というと定義されています。それでは「病氣」とは一体何でしょうか。医学生たちにこの質問をした時、最も多く出てくる答えは、「健康でないこと」です。そこで、それでは「健康」とは何でしょうかと問いますと、多くの場合、「病氣ではないこと」という答えが返ってきますが、これでは答えにはなりません。一般的な問答で、「Aとは何か？」と問われた時に、「それはBではないこと」と答え、次いで「それではBとは何か？」と問われて「Aではないこと」と答えるのは、類語反復 (tautology) といわれ、堂々巡りで、答えになっていないことを表しています。すなわち、「Aとは何か？」という問いに対しては、「～ではないこと」と否定形で答えるのではなく、「これこれこういう状態のことである」と、肯定形で答えなければならぬのです。しかし、これから述べていきますように、それはなかなか難しいことなのです。

〈中略〉

このように、「健康」と「病氣」というものは、それぞれ全く独立に定義されるものですから、「健康な状態にある」と思っている人が「病氣だ」ということもあれば、「病氣を持つ人であっても健康である」ということもありえます。それでは、医師が目指すべきは、一体何なのでしょう。一つの答えは、「病氣を治して健康を取り戻すこと」です。なるほど、それは正解です。しかし、「病氣を治すことができるか？」、「病氣を治すことができたとしても、後遺症としての障害が残ってしまった場合には、医師という存在は必要ないのでしょ

うか？」私には、まだ医学生だった頃の夏休み、夏季病院実習というプログラムに参加して、ある大きな病院の神経内科の診療を見学させてもらい、脊髄小脳変性症という病氣の若い患者さんの診療に立ち会いました。診察が終わって、患者さんが診察室から出ていかれた時、神経内科部長の先生は、「残念ですが、この方の病氣を治療する方法はないのです」と語られました。何も考えていなかった私は、「それでは、医者なんか全く役に立ちませんか」と言ったのですが、部長先生は、静かにこうおっしゃいました。「いえ、そんなことはありません。あの患者さんは、日常生活がとても不自由になっています。たとえば、トイレに行くのも大変なのです。そういったときにその困った問題をどうしたら解決できるか、それを患者さんと一緒に考える人がいなくてはなりません。それをするのは、医師の仕事ではないですか？」。こうおっしゃった先生は、今では故人ではありますが、私は、この時のこの先生の言葉を忘れたことはありません。

私が現在の専門領域である神経内科を将来の道として選んだ時、多くの級友たちから、「何で、お前は治らない病氣ばかり扱う科を選んだ？」と言われました。確かに、半世紀以上前、私たちが医学部を卒業した頃には、脳神経疾患のほとんどは、治療法が全くない状況でした。今では、状況は大きく変わり、不治といわれた脳神経疾患のなかにも、有効な治療法が確立されたものがたくさんあります。

〈中略〉

私が診療の専門領域としている神経内科には、そのように、病氣の進行に伴って、障害も徐々に進行していくという病氣が少なくありません。前にも少し触れたALS(筋萎縮性側索硬化症)は、そのような病氣の典型ですが、そのほかにも、脊髄性筋萎縮症とか、進行性筋ジストロフィーなどのような、筋肉の萎縮と筋力低下が徐々に進行してくる病氣がありますし、薬剤に反応しにくい運動障害を生じる、進行性核上性麻痺や、大脳皮質基底核変性症、あるいは脊髄小脳変性症といった病氣で、歩行不能から寝たきりになっていく患者さんも少なくありません。いまだ有効な原因治療法のないこれらの病氣では、徐々に進行してくる身体的な障害との闘いが問題となります。これらの、病氣の進捗とともに障害も進行していくような患者さんに対して、医師には何ができ、何が求められるのか。これは大変に難しい問題ですので、後ほど別に考えていくことにしたいと思います。

(岩田誠著 「医って何だろう？」 中外医学社)

問1 この文章の内容を表すタイトルを文字数20文字以内でつけなさい。

問2 傍線の部分「私は、この時のこの先生の言葉を忘れたことはありません」について、なぜ著者の心にこの先生の言葉は強く記憶されたのか、80文字以内で述べなさい。

問3 本文全体の文意を踏まえて、有効な原因治療法がない病氣に対して医師として、あるいは家族として何ができ何が求められるのか、あなたの考えを900文字以内で述べなさい。